

# 広げよう 小児看護の可能性

～あらゆる場で活躍！子どもと家族の生活を支える看護師たち～

特集にあたって

## 子どもと家族が生活している場において 発揮できる看護

近年、子どもの貧困率が増加し経済的に困窮している家族が増えるなか、保育園の施設数や対応できる子どもの人数が制限されるなどで待機児童も増加傾向にあり、子どもの生活基盤を保障することが難しい状況が生まれている。また、児童虐待に関する児童相談所の対応件数は年々増加傾向にあり、子ども同士のいじめや自殺が学童期以降に顕著に現れてくるなど、子どもの生活のなかにある安心や健全な成長・発達が脅かされている現状もある。さらに、さまざまな地域が災害の影響を受け、子どもの生活を一変させたり身体に影響を与えたりしている。このように、子どもの養育環境や子どもと家族を取り巻く社会は厳しい局面にさらされている。

では小児医療の現状はどうだろうか？

少子化の影響を受け小児病棟・外来が縮小化される一方、高度医療にともない子どもの疾病構造はより複雑化し、子どもの救急や集中治療など最先端の医療が展開される場合や、子どもの緩和ケア、ターミナルケア、在宅ケアなど子どもの生活の質を向上する医療が展開される場合もある。しかし、高度医療によって子どもの生命が救われると同時に医療依存度の高い子どもも増え、障がいがある子どもを含めたこれらの子どもの生活拠点となる施設や医療サービスに限界があることも浮かび上がってきた。また、発達障害という概念が社会に浸透してきたことで、子どもの発達障害を視野に入れた子どもと家族への支援も必要とされるようになった。このように子どもの療養環境にも厳しい現状があり、小児医療がかかえる課題は多岐にわたる。

厚生労働省の「新たな看護のあり方に関する検討会報告書」では、国民のニーズが多様化し看護師に期待する役割が拡大していることを指摘している。つまり、多様化する社会・医療・保健ニーズに敏感に対応する看護師が求められているのである。まさに、これからの時代、多岐にわたる子どもと家族のニーズに応えるには、入院施設のみならず子どもと家族が生活する場での看護が求められているといえる。

子どもがその子なりに健やかに育つ過程において、健康が保たれている時期もあれば治療を要する時期もある。しかし大抵の場合、入院治療を必要とする時期よりも家庭で療養する時期のほうが長く、また医療機関を訪れるよりも家庭を拠点にした生活のほうが長い。このように子どもと家族が暮らすところに看護が求められ、看護師は日頃、子どもと家族の健康課題と向き合っているが、どのような看護が提供されているのかについては、これまであまり注目されてこなかった。

そこで本特集では、子どもと家族の生活に密着した小児看護にはどのようなものがあるのかをあげ、そこで奮闘している看護師の活躍を紹介することで、地域社会における小児看護のニーズを探り、入院施設以外で子どもと家族にかかわる看護師が活躍できる場の広がりを持示し、これからの小児看護の展望と課題を示す。

日本赤十字看護大学小児看護学領域教授  
江本リナ Emoto Rina